

子どもの表現を育むための授業実践に関する考察

野 村 真 弘
今 西 香 寿
種 田 葉 子
石 川 裕 子

子どもの表現を育むための授業実践に関する考察

A consideration in class lessons in order to grow expression of younger children

野村真弘 今西香寿 種田葉子 石川裕子

Nomura Masahiro Imanishi Kazu Taneda Yoko Ishikawa Yuko

要約

子どもにとって表現とはどのようなもので、なぜ、それを担う活動が必要なのか、そうした問題意識を抱き、かつ実践へと繋げていくためには、まずは教育者としての「表現」にまつわる体験が必要条件であると考えた。そこで、和歌山信愛女子短期大学における2019年度新設科目「子どもの表現」において音楽・身体・造形を総合的に取り扱う「体験」を着眼点とし、教育実践とした。この教育実践に基づき、本研究テーマを(1)本授業内で扱った内容が現場で活かされるものとして妥当なのか。(2)学生自身が本授業での体験をどのように受け止めているか。と設定し、対象学生へ「授業実践後」と「教育実習終了後」とでアンケート調査を行った。そして、得られた二つの回答結果の比較、考察を行った。調査によれば、研究テーマ(1)において、授業実践で扱った内容に対する妥当性はあると考えられるものの、課題点も浮き彫りになるかたちが示された。また、研究テーマ(2)においても、対象学生たちは、教育実習での体験と、授業実践で扱われた内容への接続が充分ではなく、授業実践内容への不足を感じている学生数が増すという結果が示されることとなった。両テーマとも、課題の残る結果が示されることとなったが、「表現」における活動が単一的なものばかりではなく、広範な遊びを通した表現のあり方と子どもを見守る視点についての視座が必要であることがわかり、今後の研究テーマとして具体的な課題を発見するに至った。

1. はじめに (研究の概要)

子どもにとって表現とはどのようなもので、なぜ、それを担う活動が必要なのか。例えば、2019年現在における幼稚園教育要領及び、保育所保育指針、「表現」の項目では、子どもの感性や表現に関わる領域として、以下のような位置づけでねらいがつけられている(※1、2、3)。

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

これら3つのねらいや、前文にあたる項目を参照してみると、どれも子ども自身がどのような体験をし、それを通じて、子どもが自分なりの表現をすることが領域の目的となっている。保育者がこれらの目的を子どもと共有し、育んでいくためには、まずは保育者自身の、これに伴う体験が必要になってくるのではないかとの問題意識を抱いた。小野順子氏による「遊びの

援助と展開」(※4)においても、「保育の専門職となるためには、乳幼児に関する知識、保育・教育に関する知識、保育・教育を具体化する知識、そして知識を具体的に扱う技術が必要である」との指摘がなされており、学生これは乳幼児ばかりの問題点ではなく、子ども全般に対してもいえることだろう。この指摘における「知識の具体化」のためには、それにまつわる経験が必要であろうということが想定できる。しかし、本学学生の様子を鑑みると、特定の活動に関わる経験の不足、例えば、自身から発言する能力や、コミュニケーションのきっかけを作る能力、例えば、人前で話をする能力や、自分自身から挨拶を通して他者に話題を提供するといった能力の乏しさを感じる。また、既成のプログラムや、既成の材料によるコントロール能力には優れているようにも感じるのだが、それらを自分なりに結び付けたり、新たな想像をしたりという能力には乏しさを感じる。これをまとめてみると、特定の活動における経験の不足とは、即ち対人関係も合わせて、何かを創造すると

いう経験の不足を指摘することが出来るのではないだろうか。そのため、本学における今年度の新設科目「子どもの表現」において、それらの経験を積める内容を想定し、実践することとした。以上の実践に基づく調査によって、本研究の主要なテーマを以下に定め、考察を行う。

- (1) 本授業実践で扱った内容が現場で活かされるものとして妥当なのか。
- (2) 学生自身が本授業での経験をどのように受け止めているか。

2. 研究方法

「子どもの表現」は、1年生を対象とした前期科目であり、履修者97名であった。授業は履修者を2クラスに分け、週に1回100分ずつの開講を14回行った。

(1) 2019年度、和歌山信愛女子短期大学における前期開講科目「子どもの表現」において、前期終了時に履修学生を対象にしたアンケート調査を行った。このアンケートは、シラバスの内容を基に作成し、対象学生には授業内容への振り返りと合わせ、各回で行われた内容が、今後、保育者になるために知っておきたい、身に付けておきたい内容として、どれほど必要なものであったかについて回答してもらった。そして、ここで得られた調査結果を集計した。

(2) 以上の調査後、対象の学生の教育実習終了後、再度、同様のアンケート調査を行い、実習前と、実習後で、本授業に対する必要度がどのような変化を見せたかについて調査し、結果を集計した。

3. 実践内容

3-1. 内容の設定

和歌山信愛女子短期大学における1年生前期の新設科目「子どもの表現」について、設定は、以下(表1)である。

授業の概要	音楽・身体・造形的な観点から、さまざまな素材や道具を使って表現するための方法と、保育者にふさわしい表現力とは何かを、実践的な活動を通して学習する。
授業の目標	歌ったり、身体を動かしたり、ものをつくったりすることで保育者として必要な表現力を身に付ける。表現を捉え、イメージを表出するための手段を会得し、表現のためのふさわしい環境について構想できる力を身に付ける。

(表1:シラバス上における授業の概要及び目標)

これに伴い、授業内容を下図のように設定した(表2)。

授業内容の設定については、序論で述べたとおり、その内容が現場で活かされることを前提とした、実践的な活動を主体としている。また、3名の担当教員による専門領域(身体・音楽・造形)を独立的には扱わず、それぞれ掛け合わせたかたちで内容が扱えるよう配慮し、より総合的に「表現」について体験することができるものとした。

回	授業のテーマ及び内容(各回100分)
1	「表現する」とは何か① 授業の概要、計画、目標と評価方法について
2	「表現する」とは何か② 子どもの身体表現・音楽表現・造形表現の関わり
3	音楽と身体表現の方法 リミック1 体験1 道具を使って音楽に合わせて体を動かす
4	音楽と身体表現の方法 リミック2 アイスブレーキングと仲間づくり
5	音楽と身体表現の方法 リミック3 体験2 音楽に合わせて体を動かす
6	音楽と造形の表現方法1 絵と音楽による活動
7	音楽と造形の表現方法2 物と音楽による活動
8	音楽・身体・造形の表現方法1 準備:おてだまつくり
9	音楽・身体・造形の表現方法2 実践:おてだまで遊ぼう
10	表現的な活動を計画する1 活動の計画と準備1 グループの作成
11	表現的な活動を計画する2 活動の計画と準備2 準備
12	表現的な活動を計画する3 計画した活動の実践
13	表現的な活動を計画する4 活動の計画と実践に対する反省と考察
14	子どもの表現のまとめ 表現と保育内容との関わりと今後の課題について

(表2:シラバス上における授業内容)

3-2. 内容の実践

表現にまつわる総合的な活動を通し、対人関係も含め何かを生み出すという経験を提供することが、本実践における課題であった。特にこの授業は入学後すぐの開講であったため、各回の授業実践ではほぼ毎回グループワークを取り入れ、固定したメンバーばかりで進行されないよう留意し、行った。実践を行ううえで、授業回11の準備に予想外の時間を要したことにより、それ以降の授業回を繰り下げて行うこととなった。授

業回 14 では、本来の内容とともに授業回 13 の内容を同時にやった。そのため、授業回 14 においてのみ、以降のアンケート集計結果及び考察における各表と、シラバス上の表記が異なっていることを了承してもらいたい。シラバス上(3-1:授業内容を参照)グループワークが明記されている箇所は授業回 4 及び 10~13 と絞られているが、実際では授業回 3、5 のリミックによる活動、授業回 6、7、9 における造形活動を合わせた実践においても、毎回グループの構築を行い、都度シャッフルされたメンバーによる活動を行った。しかし、演劇的な表現の実践を行った授業回 11、12、13 については授業回 10 で設定したメンバーで固定した為、その限りではない。このように、グループワークを主体としながら、担当教員それぞれの観点から授業時における課題を示したことで、当初の目的である経験の機会として十分な成果が期待できるのではないかと考えた。また各授業回では、学生自身がその都度内容の振り返りが行えるよう、授業感想シートを利用し、内容の理解を深めるための配慮を行った。

4. アンケート調査による成果

4-1. 作成したアンケートによる授業実践後の調査結果

当実践を終えるにあたり、前期終了時に履修学生を対象にしたアンケート調査を行った。本アンケート調査では、各回の授業で行われた内容が、今後、保育者になるために知っておきたい、身に付けておきたい内容として、どれほど必要なものであったかについて回答してもらった。各項目について、右上部(表3)のような形式による回答を求めた。その結果は以下(表4)のように示された(回答者 88 名)。

本結果によれば、各回において「とても必要な内容だと感じた」、「必要な内容ではあると感じた」と回答した学生の割合はそれぞれ次ページ上部(表5)となった。(有効桁数3で四捨

回答内容	該当番号
とても必要な内容だと感じた	5
必要な内容ではあると感じた	4
どちらともいえない	3
あまり必要な内容だとは思えない	2
必要な内容だとは思わない	1

(表3)

五入)。これによれば、学生は概ね、設定された授業内容に関して必要性を認めているとの結果が得られた。しかしながら、授業回 8 の内容に関しては課題があるように見える。お手玉づくりに関しては、簡単な裁縫によるおもちゃ作りの体験であった。現状の学生自身があまり馴染めていない伝承遊びの道具をつくるためには、それに応じた導入が必要であったと思われる。伝承遊びに関わる内容については、穂丸武臣、丹羽孝、勅使千鶴らによる先行研究(※5)を発見している為、今後検討の課題としていきたい。また、絵や、物と関わる分野においても、相対的には満足いく結果とはいえない。子どもと関わる分野とはいえ、やや内容に不足があったのかもしれない。音楽と身体による表現(リミック)では授業担当者による、子どもとの実践の様子を視聴覚教材として学生は視聴し、実際の子ども様子を交えた導入が図られていた。しかし、造形分野と音楽による表現においては、やや授業実践としての実験色が強く、実際の子ども姿を想像しながら活動を行うという場面は乏しかった。その点も課題として挙げられるだろう。

項目	1	2	3	4	5
2 「表現する」とは何か② 子どもの身体表現・音楽表現・造形表現の関り	0	2	6	43	37
3 音楽と身体表現の方法 リミック1 体験1 道具を使って音楽に合わせて体を動かす	0	1	4	27	56
4 音楽と身体表現の方法 リミック2 アイスブレーキングと仲間づくり	0	2	3	30	53
5 音楽と身体表現の方法 リミック3 体験2 音楽に合わせて体を動かす	0	0	6	27	55
6 音楽と造形表現の方法1 絵と音楽による活動	1	4	12	33	38
7 音楽と造形表現の方法2 物と音楽による活動	0	1	11	35	40
8 音楽・身体・造形表現の方法1 準備:お手玉づくり	0	7	22	27	31
9 音楽・身体・造形表現の方法2 実技:お手玉で遊ぼう	0	4	17	33	34
10 表現的な活動を計画する1 活動の計画と準備1 グループの作成	0	2	11	37	38
11 表現的な活動を計画する2 活動の計画と準備2 準備	0	0	8	32	48
14 表現的な活動を計画する4 活動の計画と実践に対する反省と考察	0	0	11	27	50

(表4: 授業実践後の調査結果)

項目	4及び5の取得率(%)
2 「表現する」とは何か② 子どもの身体表現・音楽表現・造形表現の関り	90.9
3 音楽と身体表現の方法 リトミック1 体験1 道具を使って音楽に合わせて体を動かす	94.3
4 音楽と身体表現の方法 リトミック2 アイスブレーキングと仲間づくり	94.3
5 音楽と身体表現の方法 リトミック3 体験2 音楽に合わせて体を動かす	93.2
6 音楽と造形表現の方法1 絵と音楽による活動	80.7
7 音楽と造形表現の方法2 物と音楽による活動	86.2
8 音楽・身体・造形の表現方法1 準備:お手玉づくり	66.7
9 音楽・身体・造形の表現方法2 実技:お手玉で遊ぼう	76.1
10 表現的な活動を計画する1 活動の計画と準備1 グループの作成	85.2
11 表現的な活動を計画する2 活動の計画と準備2 準備	90.9
14 表現的な活動を計画する4 活動の計画と実践に対する反省と考察	87.5

(表5)

4-2、作成したアンケートによる教育実習後の調査結果

(4-1)で得られた結果から、対象学生が教育実習(2019年11月20～29日の計8日間)による自身の体験を通して、本実践の内容を改めてどのように捉えるか、調査を行った。調査は(4-1)で用いたアンケート用紙を再度使用し、実習での体験と本実践での内容を簡単に振り返ってもらった後で回答してもらった。以前のアンケート調査では、授業内容そのものについての評価という位置づけであるといえるだろう。教育実習での体験により、子どもと直接関わる経験を通したうえで、改めて授業内容の評価を得られれば、よりその内容についての細かい位置付けが得られるであろう。その結果が以下(表6)のようになった。

また、(4-1)と同様に、各回において「とても必要な内容だと感じた」、「必要な内容ではあると感じた」と回答した学生の割合は、次ページ上段(表7)である(有効桁数3で四捨五入)。

4-3、アンケート調査結果の比較

以上(4-2)の結果によれば、授業実践時(4-1)で行った調査結果から、平均で3.5ポイント(下限1.2～上限8.3)ほ

項目	1	2	3	4	5
2 「表現する」とは何か② 子どもの身体表現・音楽表現・造形表現の関り	0	0	10	45	32
3 音楽と身体表現の方法 リトミック1 体験1 道具を使って音楽に合わせて体を動かす	0	1	6	48	32
4 音楽と身体表現の方法 リトミック2 アイスブレーキングと仲間づくり	0	0	7	33	47
5 音楽と身体表現の方法 リトミック3 体験2 音楽に合わせて体を動かす	0	0	7	40	40
6 音楽と造形表現の方法1 絵と音楽による活動	0	2	16	39	30
7 音楽と造形表現の方法2 物と音楽による活動	0	2	13	46	26
8 音楽・身体・造形の表現方法1 準備:お手玉づくり	0	4	29	33	21
9 音楽・身体・造形の表現方法2 実技:お手玉で遊ぼう	0	3	25	34	25
10 表現的な活動を計画する1 活動の計画と準備1 グループの作成	0	2	12	42	31
11 表現的な活動を計画する2 活動の計画と準備2 準備	0	1	12	41	33
14 表現的な活動を計画する4 活動の計画と実践に対する反省と考察	0	1	15	35	36

(表6:教育実習終了後の調査結果)

どの変化が見られ、全ての項目で「4及び5の取得率」は低下していた。表における、それぞれの項目による回答数を比較すると、次ページ中段の結果(表8)が得られた。計算方法は[(表6)-(表4)]で示され、マイナス表記で示される部分は、[授業実践後のアンケート調査結果]から[教育実習後のアンケート調査結果]を経て回答数の減った部分であり、自然数表記で示される部分は[授業実践後のアンケート調査結果]から[教育実習後のアンケート調査結果]において増加している部分である。

これを見てみると、学生が教育実習による体験をしたところ、授業実践の内容に「とても必要だと感じた」割合は総じて低下している。その代わりに、「必要な内容ではあると感じた」割合は増加していることがわかる。また、「どちらともいえない」項目も総じて増加しており、授業実践の内容と教育実習での体験とには、やや疑問を残した状況にあると見なければならぬ。

項目	4及び5の取得率(%)
2 「表現する」とは何か② 子どもの身体表現・音楽表現・造形表現の関り	88.5
3 音楽と身体表現の方法 リトミック1 体験1 道具を使って音楽に合わせて体を動かす	92
4 音楽と身体表現の方法 リトミック2 アイスブレーキングと仲間づくり	92
5 音楽と身体表現の方法 リトミック3 体験2 音楽に合わせて体を動かす	92
6 音楽と造形表現の方法1 絵と音楽による活動	79.3
7 音楽と造形表現の方法2 物と音楽による活動	82.8
8 音楽・身体・造形の表現方法1 準備:お手玉づくり	62.1
9 音楽・身体・造形の表現方法2 実技:お手玉で遊ぶ	67.8
10 表現的な活動を計画する1 活動の計画と準備1 グループの作成	83.9
11 表現的な活動を計画する2 活動の計画と準備2 準備	85.1
14 表現的な活動を計画する4 活動の計画と実践に対する反省と考察	81.6

(表:7)

項目	1	2	3	4	5
2 「表現する」とは何か② 子どもの身体表現・音楽表現・造形表現の関り	0	-2	4	2	-5
3 音楽と身体表現の方法 リトミック1 体験1 道具を使って音楽に合わせて体を動かす	0	0	2	21	-24
4 音楽と身体表現の方法 リトミック2 アイスブレーキングと仲間づくり	0	-2	4	3	-6
5 音楽と身体表現の方法 リトミック3 体験2 音楽に合わせて体を動かす	0	0	1	13	-15
6 音楽と造形表現の方法1 絵と音楽による活動	-1	-2	4	6	-8
7 音楽と造形表現の方法2 物と音楽による活動	0	1	2	11	-14
8 音楽・身体・造形の表現方法1 準備:お手玉づくり	0	-3	7	6	-10
9 音楽・身体・造形の表現方法2 実技:お手玉で遊ぶ	0	-1	8	1	-9
10 表現的な活動を計画する1 活動の計画と準備1 グループの作成	0	0	1	5	-7
11 表現的な活動を計画する2 活動の計画と準備2 準備	0	1	4	9	-15
14 表現的な活動を計画する4 活動の計画と実践に対する反省と考察	0	1	4	8	-14

(表8:[(表6)-(表3)]によって示された回答数の比較)

5、考察

本稿における主要なテーマについて再度触れておきたい。ここでは1章で触れたように、(1)本授業実践で扱った内容が現場で活かされるものとして妥当なのか。(2)学生自身が本授業での経験をどのように受け止めているか。といった2つのテーマについて論じようとしている。4章で得られた結果をもとに、このテーマについて考察を行う。

5-1、本授業実践で扱った内容が現場で活かされるものとして妥当なのか

先に見られるように、調査結果によると授業における実践と学生自身が得られた教育実習での体験には乖離があると言わざるを得ない。勿論、教育実習中の体験とは、保育者としての生活のほんの一場面であり、実際の体験を一般化することは不可能ではある。しかし、調査結果における特に顕著にみられた変化、「とても必要だと感じた」項目が10以上の変化を見せた箇所に着目し、以下に取り上げる。

まず、授業回3及び5[音楽と身体表現の方法、リトミック1、体験1、道具を使って音楽に合わせて体を動かす]、[音楽と身体表現の方法、リトミック3、体験2、音楽に合わせて体を

動かす]では、[授業実践後のアンケート調査結果]から[教育実習後のアンケート調査結果]において、授業内容として「とても必要だと感じた」学生の割合はそれぞれ24人、15人と減少しており、実習以前、以後では大きな変化が見られる回の一つである。学生が教育実習中、「リトミック」を意識的に行うような場面に接することはあまり無いであろうと思われるが、本実習期間中は、おおよその園が生活発表会等の演目練習に時間を取っている期間でもあった。筆者も実際に園を訪れ、学生と共に園の様子も観察してきたが、やはり、多くの園で子どもたちは歌や踊りなどの練習が行われていた。これを鑑みると、やはりリトミックを含め、身体・音楽・造形を総合的に扱った表現の体験は、必要であり、授業実践としての妥当性はあるといえるだろう。リトミックや音楽に合わせて体を動かした経験が教育実習で行っていた歌や踊りの練習との関連性が見えにくい現状になっているのではないだろうか。授業実践による内容では、学生自身による表現をしてみようという内容が主体であった。しかし、教育実習で見えてきた生活発表会の練習等は、保育者側が決めた内容を行っている場面が多く見られ、学生自身の発想を活かす場面が実感出来なかったのではな

いだろうか。以上のような推察から、アンケート調査の結果が示されたのだと考えられる。

次に、授業回7、8の[音楽と造形の表現方法2、物と音楽による活動]及び[音楽・身体・造形の表現方法1、準備:お手玉づくり]では、[授業実践後のアンケート調査結果]から[教育実習後のアンケート調査結果]において、授業内容として「とても必要だと感じた」学生の割合がそれぞれ14人、10人と減少している。この結果から、造形活動と現場での実践との関連性や、音楽表現、身体表現との関連のさせ方には課題が残る結果となった。

そして、授業回11、14では「表現的な活動を計画する2、活動の計画と準備2、準備」及び「表現的な活動を計画する4、活動の計画と実践に対する反省と考察」として、学生自身で活動そのものを計画し、授業回14においては本授業実践のまとめも兼ねて、活動の振り返りを行った。なお、授業回12、13についてはアンケートによる調査を行っていないが、これはその授業回が活動にあたっての準備に充てられ、学生の個別な活動に任せられた為であった。実際の活動内容についての伝達とその振り返りは授業回11、14にて行われ、その回による調査で充分と判断した。

本授業実践では、将来保育現場に至る際、先の見通しを持った活動計画を行っていかなければならない、とのねらいを込めた実践であったが、[授業実践後のアンケート調査結果]から[教育実習後のアンケート調査結果]において、授業内容として「とても必要だと感じた」学生の割合がそれぞれ15人、14人と減少している。教育実習を通して実際の活動に触れてきたところ、このような結果となったことは、意外な結果であった。本授業による実践の方法について、ここでも再度課題にあたっていく必要があるだろうといえる。

このように、主要な研究テーマの一つとして、「本授業内で扱った内容が現場で活かされるものとして妥当なのか」については、残念ながら、全ての内容において課題が残る形となってしまった。一つ一つの実践内容が、あくまで学内での体験にばかり終始してしまい、実際の子どもの姿や、子どもと共に活動するイメージの提供が十分に活かされなかったのではないかの反省が見込める。可能であれば、本研究の対象学生には今後の現場実習(教育実習、保育実習)の経過とともに追加調査を行ってきたい。

5-2、学生自身が本授業での経験をどのように受け止めているか

対象学生たちは、教育実習を通して子どもと直接関わってきたはずであるが、授業で扱われた内容への不足を感じている学生数が増したことに懸念が残るものとなった。これには二通りの意味が見て取れるだろう。一つ目に、授業実践の内容と、現場での活動内容について乖離がある場合である。(4-3)で見られるように、アンケート調査による結果は、[授業実践後のアンケート調査結果]より[教育実習後のアンケート調査結果]の方が、「とても必要だと感じた」と回答する率が低下した。授業実践による内容が、学生自身、教育実習中で活かせなかった、または活かす術がなかったということが例として考えられる。今後現場での体験を行っていくうちに新たな発見が生じてくれることを願うのだが、より意識的に現場の状況と、子どもの姿を意識した内容による授業実践が必要であっただろう。二つ目は、授業実践の中身、即ち内容及び教授方法の不十分さである。(5-1)で挙げたように、対象学生が教育実習に赴いた期間は、多くの園が生活発表会に向けての活動に勤しんでいた。身体・音楽・造形の総合的な活動を目的とした本授業実践において、この期間に教育実習を迎えられたことは、本来良いタイミングの経験であったはずである。しかし、その活動中における視野を、学生たちに伝達することが本当に出来ていたのだろうか。幼稚園教育要領、並びに保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における領域「表現」で扱われる題材として、単一的な活動ばかりではなく、広範な遊びを通した表現のあり方と子どもを見守る視点について、今後検討していかなければならないであろう。

6、おわりに

子どもにとって表現とはどのようなもので、なぜ、それを担う活動が必要なのか。幼稚園教育要領及び、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の「表現」の項目で定められたねらい。そうした子ども自身からの「表現」が担われる場に保育者として関わっていくためには、子どもの幅広い表現を受け止められる素養、それに応じるための素養、即ち自身の「表現」にまつわる体験が必要であるというところから本研究を進めた。学生たちが何かを創造するという体験を目標とし、授業実践の場で応じたつもりであった。しかし、本研究にて行った二回のアンケート調査によれば、我々の設定した主要な

研究テーマ、(1)本授業内で扱った内容が現場で活かされるものとして妥当なのか。(2)学生自身が本授業での経験をどのように受け止めているか、については両者共に課題が残る結果となってしまった。とはいえ、本研究による対象学生への調査はまだ始まったばかりである。今後、ますます実際性を帯びてくる実習等の体験を通じて、学生たちは一つずつの体験をどのように深め、それをどのように振り返るのか、また、本授業実践の内容について、今後はどのような視座により判断がなされるのか、授業実践者として反省を込めて期待していきたい。

7、注及び参考文献

※1、文部科学省、2017年、『幼稚園教育要領〈平成29年告示〉』、フレーベル館

※2、厚生労働省、2017年、『保育所保育指針〈平成29年告示〉』、フレーベル館

※3、内閣府、文部科学省、厚生労働省、2017年、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈平成29年告示〉』、フレーベル館

※4、小野順子著、2018年、『遊びの援助と展開』、中国学園紀要17、pp.1-9

※5、穂丸武臣、丹羽孝、勅使千鶴著、2007年、『日本における伝承遊び実施状況と保育者の認識』、名古屋市立大学大学院人間文化研究科、「人間文化研究、pp.57-78」)

※参考文献1、奥村正子・山根直人・志村洋子著、2007年、『教員養成校における領域「表現」の音楽側面の検討(1)－幼稚園及び小学校の教師の意識比較－』、埼玉大学紀要、p p.69-82